

金剛力士像

No.359
平成29年1月

藻原寺山門の両側に安置されている仁王像(二王とも書く)は、仁王様として親しまれているが、これは金剛力士像である。門の正面向かって右側の像は阿形の金剛像、左側の像は吽形の力士像、共に髻から足の裏までの高さは二八五・〇cmで、材質は松の寄木造りである。

この金剛力士像は、共に藻原寺伽藍の守護神である。金剛像は体をやや右に向け左手を肩まで上げ持物の金剛杵を持っている。力士像はやや左を向いて持物はない。共に勇猛果敢な相をしている。



▲吽形の力士像



▲阿形の金剛像

この像が作られたのは、平成十四年に解体修理した際、頭部内刻りの墨書銘により明らかになった(仁王像の寄進者については、平成二十七年広報もばら七月一日号に寄稿した「藻原寺の山門を造り、大堂を改修した書家花房雲山」を参照)。

作者は、関東大仏工相州鎌倉住法印長盛、小仏工等である。阿形の金剛像には、「壬戌年九月十八日木取初」とあり、その後「水神山遷年七月一日成就畢」とある。壬戌年は永禄五年(一五六二)であることから、木取りの始まりは、同年の九月十八日で、成就した日は、吽形の力士像と同様、翌六年の七月一日と思われる。

吽形の力士像は、「永禄陸癸亥柒月一日」と墨書があるが、これは永禄六年(一五六三)七月一日のことである。阿形の金剛像と同様成就したものとされる。その他仁王堂と金剛力士像を寄進する事に合わせて近隣の僧俗等が名を連ねている。

ところで、永禄年間(一五五八〜一五七〇)という時代はどの様であったかという点、世は正に戦国時代、織田信長が台頭し、関東にあつては、小田原北条氏、安房里見氏との抗争に、甲斐

武田氏、越後の上杉氏も絡み混沌とした政治情勢の中、野田醬油の祖と言われる飯田市郎兵衛が豆油から醬油を醸造し、甲斐の武田氏に溜醬油を納めたときれるのもこの頃である。

近隣では、勝浦城主の正木時忠が、主家の里見氏に反旗を翻し、同族の一宮城主正木憲時を攻略、この戦火で一宮玉前神社が焼失したとされるなど不安定な時代であった。

さて、現在の山門(仁王門)は、昭和八年に建替えられ藻原寺のみならず茂原の象徴ともなっている。筆者が幼い頃古老達は藻原寺のことを大坊(デーボウ)と呼んでいた。それは、総門から山門までの参道に坊が多く建てられていたからであり、坊がなくなり参道の両脇に松が植えられ、藻原寺へ行く度、古老からこの松の木には天狗が住んでいるとよく聞かされた事がある。それ程の松の原木が生い茂り、松の間から仁王門の屋根が微かに見える程度であった。

現在には松に代り桜並木となり、花見客で大いに賑う名所となっている。

茂原市文化財審議会委員
佐藤 信夫

文芸コーナー

新たに

山本 明美

のぼって来た
今日の太陽
昨日とはちがう
真新しい
今日の太陽

昨日の太陽は
きのうの夕方
火のように赤く
西の山に
燃え落ちたから
もういない

薄桃色に
澄んだ朝
のぼって来た
今日の太陽は
過ぎた日のことを
何も知らない

たった今
この瞬間から
始まることしか
分からない
踏み出そう
前を向いて
新しい時の中へ

◎選評 斎藤正敏

今日の太陽は今日の太陽。人間の視点からはそう見えますね。今日の太陽から踏み出す一歩。はじまりは常に新鮮です。

- 偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。
- 投稿は楷書でお願いします。作品・氏名にふりがなをふってください。

※俳句、短歌、川柳の原稿送付先
〒297-8511 茂原市道表1番地 茂原市役所秘書広報課宛「文芸コーナー」と朱書きしてください。

